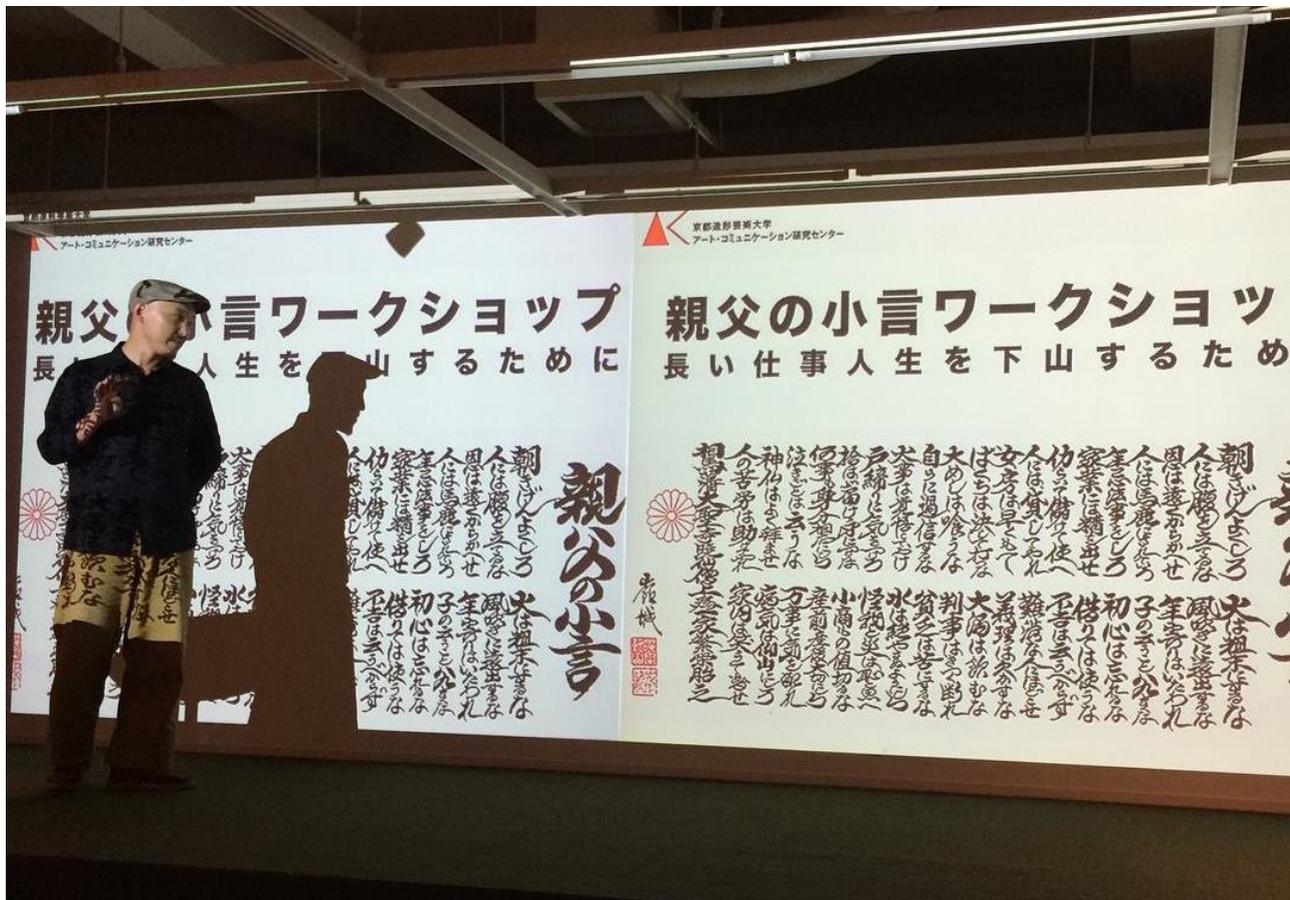


火は粗末にするな？風呂にはさっさと入れ？「親父の小言」ワークショップ

平野智紀

内田洋行教育総合研究所 研究員

／経営学習研究所 理事



本ワークショップについて

親父の小言ワークショップは、2015年9月7日、内田洋行・東京ユビキタス協創広場CANVASにて、東京大学准教授／経営学習研究所代表理事の中原淳先生と、京都造形芸術大学アート・コミュニケーション研究センターの伊達隆洋先生・岡崎大輔先生、内田洋行教育総合研究所／経営学習研究所の平野智紀の4名による共同で企画された。

経営学習研究所と京都造形芸術大学のかかわりは、2011年にSHIBAURA HOUSEで開催された「《対話型鑑賞》を人材育成に活かす」にさかのぼる。それ以来、アートを人材育成に活かした企業研修は、ACOPをはじめとしていくつかの取り組みが行われてきている。今回は経営学習論を専門とし、今年不惑を迎えられた中原淳先生の、人材育成における「下山」への問題意識（これまでの人材育成は「登山」に着目してきたが、超高齢化社会において仕事人生が長くなっていく中で、いかに仕事との関わり方を変えていくか）から、本ワークショップは発案された。

アート作品はモノであり、作家がつくるものだが、アートは、鑑賞者とアート作品の間に起こるコミュニケーションのことを示す、というのは、ACOPにおいて繰り返し主張されていることである。ウンベルト・エーコやニコラ・ブリオーを参照するまでもなく、現代において、アートとはコミュニケーションをつくることであるといえる。本ワークショップも、居酒屋のトイレでよく見かける「親父の小言」をきっかけにした、コミュニケーションを組織するアートの取り組みであるということもできる。

ワークショップの内容

本ワークショップは、この男女共同参画社会にあって、あえて、35歳以上のはたらく男性限定企画として開催された。長い仕事人生の先にも続く人生を充実させるために、これからどんな備えをすべきか、35歳以上の“親父”という同じ立場同士で対話し、考えることが目的であった。

同じ“親父”という立場もあってか、ワークショップ開始前から提供したビールのおかげもあってか、和気あいあいの状態で、会場は熱い空気につつまれた。大木こだま・ひびきの「往生しませ」をキーワードとした、進行役の伊達先生によるステップを踏んだファシリテーションにより、自分たちの「これまで」そして「これから」について、笑いながら、顔をしかめながら、うなりながら、対話が進んでいった。



ワークショップ後半は、今の自分自身に向けた「親父の小言」を書いたための、という内容であった。中原研究室OGで日本教育書道連盟三段取得の我妻優美さん（雅号：春光）による書のレクチャーを受けて、名刺サイズのカードに自分に向けた小言を書き込むというワークを行った。ワークショップで得たことを、ふだんから持ち歩いている名刺入れに入れてもらうことで、経験を日常に持ち帰るためのちょっとした仕掛けであった。

その結果、「妻の目を見て話せ」「話の腰を折らない」「生涯不悟」といった、新しい「親父の小言」



が、親父の数だけ生まれた。MALLの落款を押してラミネートすると、かなり様になって見える。

参加者からは、「同じ“親父”という立場であることで安心感が生まれ、一方、同じ立場でも異なっている多様な価値観に刺激を受けて、視野が広がり、思考が深まった」といった感想が出るなど、対象を絞って開催した意義を実感して下さったようである。さらに「将来のことを考え、親父同士で対話したことを踏まえて、小言として集約させる機会は貴重だった」といった感想もいただき、仕事人生の先に続く人生も充実させるために、本ワークショップをよいきっかけになったことが伺えた。

今後、ブラッシュアップさせた続編を関西にて開催予定である。